複合動詞後項「～たつ」の意味
――文法化の観点から――

小浦方　理恵

1. はじめに

森田（1989）に「(複合動詞後項『～たつ』は)“出発／確立／完全に／ひどく”の強調意識に至るまで本動詞と同じく意味の幅は広い」とあるように、「～たつ」は多様な用法を持っている。例えば、例1の「～たつ」は<直立>の意味を持っているが、例2では「煮える」という現象の<発生とその高まり>を表している。また、例2の場合には、「～たつ」は内容語ではなく現象のアスペクトを表現する機能を持つようになっている。

1. 壁がそそりたつ。
2. 湯が煮え立つ。

本稿はこの意味の広がり、意味と文法的機能の関わりを「文法化（grammaticalization)」の観点から説明することができると考え、分析を行ったものである。

河上（1996：179-180）によると「『文法化』とは、もともと内容語だったものが、次第に機能語としての文法的な特質、役割を担うようになる現象」である。また、文法化の中でも、複合動詞後項の文法化を田辺（1996：2）では「空間相を表す後項動詞が、時間相、または、程度・密度・強さ・完成、を表す後項動詞として移行する際に起こる変化」としている。

複合動詞後項における文法化の研究には、田辺（1996)、百留（2001)、菊田（2008）などがあり、近年主に認知言語学の分野で盛んに行われている。

2. 先行研究

第2章では、複合動詞後項の文法化についての先行研究をいくつか取り上げ、その後、本稿の対象語である「～たつ」の意味についての先行研究を概観する。

2.1 複合動詞後項の文法化についての先行研究

まず、田辺（1996）では「～こむ」「～ぬく」「～きる」「～あげる」「～あがる」の5つの後項動詞を対象に、それぞれが持っている意味をアスペクト的表現効果の出現の度合いによって3段階に分けた。第一段階は動作性の前項動詞を取り、辞書的な意味がそのまま反映されている段階である。第二段階も第一段階と同じく、動作性の前項動詞を取るが、意味は補助動詞化されている。最後の第三段階では前項動詞は非動作動詞も取ることができ、意味も補助動詞化しているも

のである。

次に、百留（2001）の研究では、継続を表す「～続ける」の文法化のプロセスを明らかにするため、その意味を通時的観点から分析を行った。その結果、「～続ける」が文法化し、「～することを継続する」という意味が確立するのは大正期に入ってからであること、そして新しい意味構造は「続ける」自体の意味変化や、後の時代における語構造の再解釈によって出現したことを明らかにした。

最後に、菊田（2008）の研究について述べたい。菊田は、始動のアスペクトを表す複合動詞「～かかる」「～かける」の持つ志向用法と始動用法のうち、始動用法に注目し、その用法の成立を文法化という視点で通時的なデータから検証を行った。そして最後に、文法化のメカニズムについて考察を行っている。菊田の中では複合動詞後項が自立語としての意味を希薄化させ、補助動詞のような機能を持つ現象（補助動詞化）と文法化の関わりについて述べられている部分がある。複合動詞後項の補助動詞化は以下の 3 点で文法化の定義を満たしているという。

a. 複合動詞後項の意味の抽象化
b. 複合動詞後項の自立語としての地位の消失
c. 複合動詞の選択制限が消失し、ほぼどのような前項動詞とも結合する（生産性の向上）

本稿では、上記の 3 つを複合動詞後項における文法化の特徴と考え、第 5 章でこの枠組みに従って考察を行う。

2.2 複合動詞後項「～たつ」についての先行研究

複合動詞としての「～たつ」の研究には、中村（1998）と姫野（2003）が挙げられる。

中村は辞書に登場する頻度の高い 457 個の複合動詞後項を選び、各々に結合可能な前項数を調査した。さらに、その中で後項の意味変化が顕著であり、日常よく使われる「－上げる、－合わせる、－入る、－返す、－かける、－切る、－越す、－込む、－出す、－立つ、－立てる、－付ける、－出る、－払う、－分ける」の 15 個の複合動詞後項について、その意味変化の展開を認知意味論的な立場から考察している。中村は本研究の対象語である「－立つ」についても分析を行っており、「－立つ」の意味の展開プロセスが図 1 のように示されている。

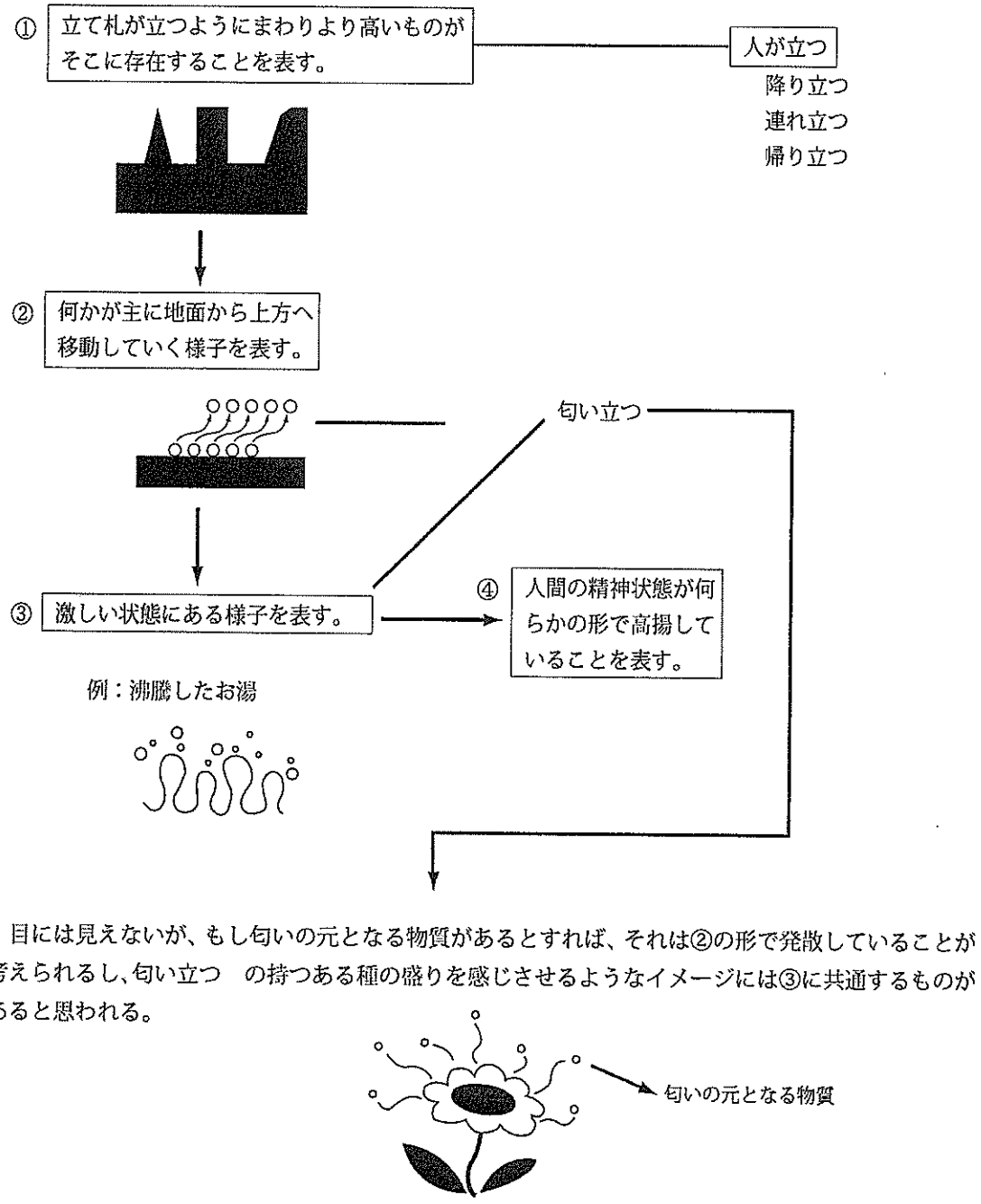

図１　「ー立つ」の意味展開プロセス（出典:中村,1998）

姫野は「～つく」「～つける」「～あがる」「～あげる」などの多義的後項動詞の意味・用法を整理・分類した研究であり、その項目の一つとして「～たつ」が取り上げられている。その中で「～たつ」の意味は表１のように分類されている。また、「思いたつ」「引きたつ」「成りたつ」の意味について、個別に取り上げ説明を行っている。

表 1　姫野（2003）による「～たつ」の分類（出典:姫野,2003）

「～たつ」の複合動詞	自動詞か 他動詞か	意味特徴
1.　[が]　～たつ 壁　が　そそりたつ	自＋たつ＝自	直立 （出現）
2.　へ に 場所　（に／へ向けて に／へ向かって をめざして）　～たつ 場所　[を／から]　～たつ 目的地　へ向けて　飛び立つ 巣　を　飛び立つ	自＋たつ＝自	出発
3.　感情　[が]　～たつ 心　が　勇みたつ	自＋たつ＝自	発露 高揚
4.　[が]　～たつ 湯　が　煮え立つ	自＋たつ＝自	生起 昂進
5.　その他 ～を　思い立つ ～が　引きたつ ～が　成りたつ	他＋たつ＝自 他＋たつ＝自 自＋たつ＝自	

これら 2 つの研究で、「～たつ」の用法について、そしてその用法間のつながりについては明らかになったが、「～たつ」の多様な用法と文法化の関連については明らかになっていない。したがって、研究課題を「～たつ」の意味・用法と「～たつ」の文法化の様相を明らかにすることと設定し、分析を行う。

3.　分析データ

姫野（2003）の「複合動詞リスト」に掲載されている複合動詞「～たつ」50 語に『複合動詞資料集』『逆引き広辞苑』に掲載されていた 13 語を加えた 63 語を分析の対象にした。その中で現代日本語ではあまり見ない表現については日本語母語話者 23 名にアンケートを取り、80 パーセント以上の割合で使わないという結果になった項目は分析からはずした。

そして、本論文で用いた用例の出典は用例の隣に略語で記した。用例の隣に記述がないものは、

筆者の自作文である。

＜広＞…『広辞苑』

＜姫＞…姫野（2003）

4. 「～たつ」の意味・用法

まず、「～たつ」の意味・用法を見てみたい。分析の結果、「～たつ」には4つの用法があることがわかった。

4.1 「～たつ」の意味・用法1＜直立＞

用法1は、「～たつ」が＜直立＞の意味を表している。また、前項動詞は主体が＜直立＞する際の様相を表す役割を持っている。以下、＜直立＞用法に分類された「～たつ」の例文を見ながら詳しい説明を行う。

降りたつ、下りたつ、切りたつ、ささくれたつ、そそりたつ、 そびえたつ、突きたつ、突ったつ、並びたつ

3. デカン高原の北方に切り立った山々　＜姫＞
4. ささくれ立った板　＜広＞
5. 超高層ビルがそそり立つ　＜広＞
6. 呆然と突っ立つ　＜広＞
7. 豪邸が並び立つ

例3は山々の表面が切ったように鋭い状態で直立している様子を表している。また、例4は板の表面がささくれた状態で板から直立している様子を表している。

例8、例9の「降り立つ」も＜直立＞用法に分類されるものである。

8. 自家用ジェット機で成田空港に降り立ったプレーヤー　＜姫＞
9. 黒塗りの車から降り立った政治家　＜姫＞

しかし、姫野（2003：209）は「降りたつ」の意味について、「『降りたつ』は状態性ではなく、人が別の場所からやって来て、その場に姿を現すことを表す」と述べている。つまり、「降りたつ」の「たつ」が表す意味は＜直立＞ではなく、今までなかったものや人が姿を現すという＜出現＞の意味を表すというのである。しかし、＜出現＞という意味は前項動詞「降りる」からもたらされるもので、「～たつ」が表している意味は「直立した状態」を表しているとも考えることができる。したがって、今回は「降りたつ」を＜直立＞の意味を持つ用例とした。

4.2 「～たつ」の意味・用法2＜出発＞

＜出発＞用法に分類されたのは以下の複合動詞である。

出でたつ、飛びたつ、連れたつ、舞いたつ、群れたつ

例 10 から例 12 は「～たつ」が＜出発＞の意味で用いられている。この＜出発＞の意味は、「人が立つときは主に何かを行動するためにそこから離れ、出発するときである」というメトニミー的拡張により、生じたものだと考えられる。ここでも＜直立＞用法と同様に、前項動詞は＜出発＞する際の様相を表している。

例 10 は前項動詞の「連れる」という様相を伴い、買い物へと＜出発する＞意味である。

10. 家族と連れ立って買い物に行く　＜広＞

例 11 は巣から離れ、＜出発＞する意味である。

11. 巣を飛び立つ　＜姫＞

例 12 でも、複合動詞「飛びたつ」が用いられている。

12. 飛びたつ思いで帰郷する　＜広＞

例 12 も例 11 と同様に、前項動詞「飛ぶ」は出発する様相を表していると考えられるが、この場合、「飛ぶ」は空間的移動の意味ではなく、「飛ぶような速さで」という、より拡張的な意味を表している。

4.3　「～たつ」の意味・用法 3＜確立＞

＜確立＞用法に分類されたのは以下の複合動詞である。

成り立つ、引き立つ

この＜確立＞の意味は＜直立＞用法から派生したものと考えられるが、＜直立＞の場合、主語が具体物であるのに対し、＜確立＞用法の場合は主語が抽象的な事物になっている。つまり、＜直立＞用法と＜確立＞用法の間には、具体から抽象へのメタファー的写像が生じていると考えられる。この用法の例を以下に記す。

例 13 から例 15 は「成り立つ」の用例である。その事態が存在するだけではなく、それが堅固なものであり、その事態が長い間保持されることを含意している。姫野（2003：212）でも、「成り立つ」について、「『成り立つ』は、『たつ』に『確立』の意味が含まれる」とある。

13. 契約が成り立つ　＜広＞

14. 商売が成り立たない　＜広＞

15. 粒子はさらに小さい基本粒子から成り立っている　＜姫＞

例 13 では、「契約」が結ばれることを表しているが、その＜確立＞という意味から、契約が簡単に破られるようなものではなく、堅固なものというニュアンスを持っている。例 14 と例 15 における「成り立つ」も主語の確立性、完成性を保持する意味を付加する効果があると考えられる。

さらに、例 16 と例 17 は複合動詞「引き立つ」である。話者の意識を「引き」、主体の存在が＜確立＞する意味を表している。

16. 味が引き立つ　＜広＞

17. （俳句は）上の句と下の句を入れ替えるだけで実に見事に作品が引き立ちます　＜姫＞

4.4　「～たつ」の意味・用法 4＜（感情・現象の）発生、高まり＞

用法 4 は＜（感情・現象の）発生、高まり＞の意味を持っている。この用法は前項動詞だけでも意味が通じることから、内容語としての意味が薄くなっていることがわかる。それでは、この用法の「～たつ」がどんな意味を表しているのかというと、前項動詞が表すある感情や現象が「発生し、そして高まる」という一連のプロセスを表していると考える。

この用法は姫野による「～たつ」の研究結果の中で、「感情の発露・高揚」に分類されたタイプと、「生起・昂進」に分類されたタイプ [(1)] を合わせたものである。筆者は「感情の発露・高揚」と「生起・昂進」に分類された複合動詞「～たつ」において、「～たつ」が表す意味は同一のものであり、「感情の発露・高揚」と「生起･昂進」という二つの分類の意味の違いは主体が感情であるか、現象であるかの差によるものと考えている。

以下、この用法に分類された例文を見ながら説明したい。

焦りたつ、うずきたつ、濁りたつ、いきりたつ、勇みたつ、色めきたつ、 浮かれたつ、浮きたつ、うねりたつ、怒りたつ、思いたつ、香りたつ、 薫りたつ、気負いたつ、競いたつ、狂いたつ、騒ぎたつ、ざわめきたつ、せきたつ、 たぎりたつ、たけりたつ、煮えたつ、においたつ、煮たつ、逸りたつ、奮いたつ、 吠えたつ、みなぎりたつ、燃えたつ、萌えたつ、沸きたつ、湧きたつ

例 18 の「いきり立つ」は現在では一語化され、単純動詞「いきる」を単独で使うことは見られないが、『広辞苑』によると「いきる（熱る）」は「①むし熱くなる。ほてる。いきれる。②いきまく。りきむ」とあり、「いきり立つ」においては②の意味で「いきる」が用いられている。したがって、例 18 における「いきり立つ」の意味は、不公平な判定に対し、「いきる」という感情が発生し、その程度が高まっている状況を表している。

18. 不公平判定にいきり立つ　＜広＞

例 19 の「勇みたつ」は、「勇む」という感情が発生し、その程度が高まっていることを表している。

19. 心が勇みたつ　＜姫＞

例 20 から例 22 における「～たつ」の意味も同様に、「色めく」という現象の発生とその程度の

高まり、「(気分が) 浮く」という現象の発生とその程度の高まり、「うず潮がうねる」という現象が発生し、その程度が高まるという意味を表していると解釈できる。

20. すわとばかりに色めき立つ　＜広＞

21. 心の浮き立つリズム　＜広＞

22. うず潮がうねり立った　＜広＞

例 23 の「香りたつ」、例 24 の「薫りたつ」については、「香り・薫り」の発生とその高まり（この場合は顕在化)、という意味に加え、その結果、「香り・薫り」が広がる様子も表している。

23. 挽きたてのコーヒーが香りたつ

24. アルマは喪服に身を包み、憂いに沈んでいた…その立ち居に薫り立つ美しさがあった。　＜姫＞

例 25 の「燃え立つ」も「燃える」という現象が発生し、その程度が高まる様子を表している。これは、「萌えたつ」でも同様である。

25. 炎が燃え立つ　＜広＞

また、例 26 や例 27 の例文は「逸る」「奮う」という感情が発生し、程度が高まるという意味を表している。

26. 逸り立つ心を抑える　＜広＞

27. 勝報に奮い立つ　＜広＞

5.　「～たつ」の文法化

第 4 章では、「～たつ」の 4 つの用法を見てきた。第 5 章ではこれを文法化の観点から考察する。まず、「～たつ」のアスペクト的表現効果の出現の度合いによって、先ほどの分析で行った 4 つの用法を 3 つの段階に分けた。そして、それぞれの段階における特徴を考察したい。

5.1　＜直立＞用法、＜出発＞用法の段階（段階 1）

まず、＜直立＞用法と＜出発＞用法は前項動詞がなくても意味が通じるものが多く、＜直立＞や＜出発＞の意味を強く表している。また、この段階での前項動詞の機能は＜直立＞や＜出発＞する際の様態を表しており、いわば後項動詞を修飾する機能を持っていた。菊田（2008）の複合動詞後項の文法化の特徴 (2) と合わせて考えると、段階 1 の「～たつ」には、意味の抽象化は起こっていないこと（定義 a)、自立語としての性質が強く、機能語の性質が見られないこと（定義 b）から、文法化は起こっていないと考えられる。

5.2　＜確立＞用法の段階（段階 2）

＜確立＞用法では、「～たつ」はある状態が堅固なものであり、しっかりと保たれているという＜確立＞の意味を持っている。つまり、この用法は上記の＜直立＞用法や＜出発＞用法と違い空間的意味を持たず、ある事態が最終的な局面に「到達」したり、「完了」したりするアスペクトマ

ーカー的な側面を持ち、機能語化が進んだ段階だと言うことができる。この段階では、＜直立＞用法や＜出発＞用法のように空間的意味を持つ内容語から、アスペクトを示す文法的機能語へ変化していると言えよう。

そして、前項動詞に注目すると、＜直立＞用法や＜出発＞用法の前項動詞「降りる」や「連れる」などと違い、＜確立＞用法では「成る」や「(注意を) 引く」のように動作性の低いものになっており、田辺（1996）と同様に前項動詞が非動作性のものへと範囲が広がっていることがわかる。

また、河上（1996）では文法化に伴う言語現象として、内容語としての意味が希薄になり、喪失されるようになる現象である、「意味の漂白化」を挙げているが、「～たつ」も内容語としての意味が薄くなり、その代わりにアスペクトマーカーとしての機能を獲得したと言える。

最後に、菊田で示されていた複合動詞後項における文法化の定義と、段階2を照らし合わせてみると、意味の抽象化が行われていることから、定義aを満たしている。また、この段階では前項動詞がなくなると、その許容度が段階1よりも落ちることから、自立語としての地位がなくなってきていると言え、定義bも満たしている。しかし、この段階に当てはまる複合動詞は少なく、定義cの生産性の向上には合致していなかった。

5.3 ＜（感情・現象の）出現、高まり＞用法の段階（段階3）

＜（感情・現象の）出現、高まり＞の用法はまったく内容語の意味を失っているわけではないが、動作を表す意味ではなく、ある現象の起こり方を示している点で、文法化が進んでいると言える。

また、ここでも段階2と同様に、内容語としての意味が薄くなり、意味の漂白化が起こっている。大堀（2002：192）に「経路を含んだ動詞は相の標識へスキーマを保存しながら補助動詞化する傾向が強い」とあるが、この制約は「～たつ」についても当てはまり、＜直立＞＜出発＞用法の空間的意味が＜（感情・現象の）発生、高まり＞用法のアスペクトを表す時間的意味へとメタファー的写像が行われたと考えられる。

そして、この用法の特徴として、「焦りたつ」「いきり立つ」「勇みたつ」などの心的世界を表す複合動詞が多く見られた。河上（1996：189）では現実世界から心的世界へと意味が拡張することが述べられており、この点からもこの用法は「～たつ」の中でもより抽象化が進んでいる段階だと考えられる。さらに、前項動詞に注目すると、自然現象や感情など、＜確立＞用法と同じように動作性の低いものが多く、前項動詞の範囲が非動作性のものへと広がっていると言えよう。これは田辺と同様の結果である。

そして、この段階の「～たつ」の数が3つの段階の中でもっとも多くなったが、生産性の向上は菊田で示されていた複合動詞後項における文法化の定義cに合致している。また、この段階では意味の抽象化が行われていることから、定義aも満たしている。最後に、段階3は前項動詞が

なくなると、複合動詞のときの意味を成さなくなることから、定義 b の自立語としての地位の消失とも合致している。したがって、この段階は文法化の 3 つの特徴を満たしており、3 つの段階の中でもっとも文法化の進んだ段階だと言える。

6. 結論と今後の課題

今回は、「～たつ」を 4 つの用法に分け、用法別に「～たつ」の意味を記述した。また、姫野（2003：208）には「『～たつ』はすべて語彙的複合動詞」であると述べられているが、「～たつ」には文法的機能を表す用法もあることが明らかになった。さらに、4 つの用法を文法化の観点から 3 つの段階に分け、そのうち 2 つには文法化が起こっていることを示した。そして、文法化が進むことによって、接続する前項動詞の範囲が動作性動詞から非動作性動詞まで広がることがわかった。

今後の課題としては、田辺（1996）の「～あがる／～あげる」の研究、菊田（2008）の「～かかる／～かける」の研究のように、「～たてる」の意味・用法、そして文法化との関わりについて分析を行い、「～たつ」との前項動詞の違いと対応、さらに意味的対応について考えたい。

注

（1）表 1「姫野（2003）による「～たつ」の分類」を参照のこと

（2）2.1 の菊田（2008）についての記述を参照のこと

参考文献

岩波書店辞典編集部編『逆引き広辞苑』（1999）第五版対応、岩波書店

大堀壽夫（2002）『認知言語学』、東京大学出版会

河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』、研究社

菊田千春（2008）「複合動詞『V かかる』『V かける』の文法化—構文の成立とその拡張」『同志社大学英語英文学研究』第 81/82 号、pp.115-165

田辺和子（1996）「日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化」『日本女子大学　紀要　文学部』第 45 号、pp.1-16

新村出編（1998）『広辞苑』第五版、岩波書店

中村その子（1998）「日本語複合動詞の意味形成と特性—言語認知の立場から—」『経営・情報研究』第 2 号、pp.65-155

野村雅昭・石井正彦（1987）『複合動詞資料集』、国立国語研究所報告

姫野昌子（2003）『日本語複合動詞の構造と意味用法』、ひつじ書房

百留康晴（2001）「継続を表す補助動詞『～続ける』の成立」『言語科学論集』第 5 号、 pp.109-120

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』、角川書店